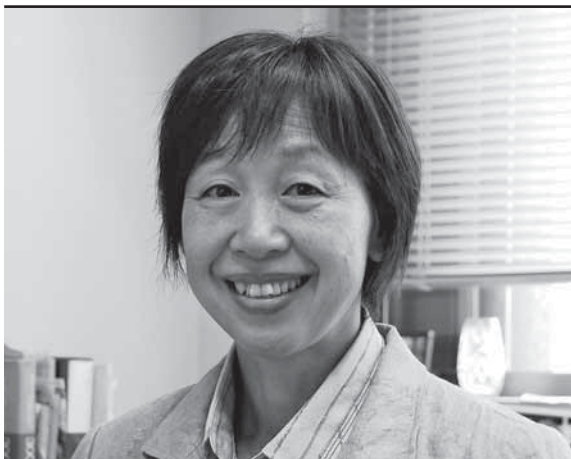


やりたいことは、
だんだん見えてくる。



留学生センター

講師 **マスデン眞理子**さん

Masden Mariko

●プロフィール

- 1982年 学習院大学英米文学科卒業後、茨城県の県立高校で4年間英語教諭として勤務。(～86)
- 1989年 アメリカ合衆国のイリノイ大学で英語教授法の修士号取得。メイン州のポーティン大学アジア学科専任講師として日本語を教える。(～91)
- 1993年 熊本大学文学部助手
- 1995年 熊本大学留学生センター講師として、留学生相談および日本語教育を担当する。

留学生センターでの仕事

熊本大学には約300名の留学生が学んでいます。留学生センターでは留学生のための日本語教育や相談の他、日本人学生を対象に海外留学の相談を受けています。博士課程の留学生は既婚者も多く家族とともに暮らす人もいます。これらの留学生が安心して生活できるよう地域と連携しながら環境を整えることも、マスデンさんの仕事のひとつです。

アメリカ留学が人生の転機

マスデンさんは留学生と関わる日常ですが、学習院大学で英米文学を専攻していた20代のころ、遠く離れた外国に憧れを抱いていたものの、自分とは無縁のことだと思っていました。卒業後これといった職業意識もないままに、故郷の茨城の県立高校で英語教諭をしていた時、アメリカ人の英語指導助手と友達になりました。外国人と同じ目線で語り合うなかで、初めて彼らの国を身近に感じるようになり、次第にアメリカの大学院で英語教授法を勉強してみたいという思いが強くなりました。当時はアメリカでの生活費も授業料も高く、その資金をどうするかが一番の問題でしたが、日本語学科で助手ができれば授業料が免除になり、お給料も出るというので、イリノイ大学を選びました。

可能性は自分が決める

大学時代には想像もしなかった留学ができたのは、このアメリカ人の友達との出会いでした。あるときその友達が、「He can do it. I can do it!」と言うのを聞き、自分の可能性はここまで思い込んでいた自分の天井に風穴があいたような気がしました。自分にはできないという思いは、自分の心が決めたことだったんだ、それならできると思えば、道は開けるかもしれないと感じ、留学への一步を踏み出しました。周りでは、今の安定した職を捨てて将来の当てもないことをするのは無謀だと、心配する人が少なくありませんでした。「今になって考えると、女性だからしたいことができたのかもしれないね。男性の方がしがらみが大きいでしょうね。」

足りない部分は助けてもらう

こうして飛び込んだアメリカで修士号をとり、アメリカの大学で日本語を教え、イリノイ大学で知り合ったアメリカ人と結婚しました。その後、ご主人が熊本学園大学の職を得たのを機に16年前に熊本に移り住みました。マスデンさんはこれまでの人生を振り返り、「自分の人生がこのような展開をするなんて、大学出たての頃には想いもしなかったことです。今の学生は3年生から就職活動をし、将来についてしっかりしたビジョンを持っているようですが、それに比べると私はなんとも行き当たりばったりで恥ずかしいのですが、先の先まで心配すると何もできなくなってしまうがち。能力の足りない部分は、いろいろな局面で出会えた人たちに助けられました」と笑う。

留学に負けず劣らず、子育てでも悪戦苦闘しつつも学びの場となっています。大切な経験ですが、仕事との両立に悩むことも多々あったといいます。「特に子どもが小さいときは100%仕事に専念することができず、仕事も家事も育児もぜんぶ中途半端で自信をなくしていました。そんな時、友達に『仕事と家事と育児を全部足せば100%超えるよ』と冗談まじりに励ましてもらい、細々とではありますが仕事を続けることができたのだと感じます。」